

TAT課題における自己体験と「自意識」

高 橋 悟

【問 題】

TAT

TAT (Thematic Apperception Test 主題統覚検査) は、マレーを中心とするハーヴァード大学心理学クリニックのスタッフが考案し、1943年に完成された心理検査である。この心理検査は、様々な受け取り方が可能であるような絵 (以下「図版」) に対して作られる物語から、被検者のパーソナリティ特徴を明らかにしようとする投影法である。実際の検査の施行にあたってマレーらは、それぞれの適用対象に20枚の図版シリーズを構成し、それらを半分に分けて、前半10枚をまず施行し、数日後に残りの10枚を施行することを提唱した。しかし現在ではそれぞれの検査者が有用であると判断した10枚程度の図版が使用されることが多い。これは、マレーの方法を採ると検査の実施に多くの時間が掛かるためであり、またHartman (1970) が指摘したように、31枚の図版の中には臨床的に重要な情報を与えてくれる図版と、そうでない図版があることが明らかになってきたためでもある。

マレーはTATの解釈法として、欲求圧力分析need-pressure analysisを提唱した。これは、物語の中に現れる主人公を被検者が同一視している人物であると捉え、その主人公がいかなる欲求を示し、そして環境からどのような圧力を感じているのかということをもとに、被検者の人格の諸傾向や、被検者の世界を見る見方を明らかにしようとする分析方法であるといえる。

しかしこの欲求圧力分析は、厳密な意味では現在ほとんど用いられていない。その理由については鈴木 (1997) が検討しているが、その要点は、欲求圧力分析では最初に物語中の主人公を決定しなければならないが、これが実際は必ずしも容易ではないということである。また先に述べた通り、マレーが想定した20枚の図版シリーズがそのままの形ではほとんど使用されなくなっているため、標準値との比較ができなくなったことも理由のひとつである。

その後の研究により、Rapaport (1946)、Stein (1948)、Henry (1955)、Holt (1978)、Bellak (1986)、日本では安香 (1990)、山本 (1992)、鈴木 (1997)、坪内 (1997) らがTATの反応分類と解釈について見解を示している。しかし、包括的なTAT解釈法の確立は未だ果たされていないというのが現状である。

心理療法におけるTATの利用

このように解釈法が確立しない一方で、TATを心理療法に適用し、その施行や反応を治療的に活用するという利用法が考えられてきた。これは、TATが本来、語り手の空想を刺激することに

よって、語り手の無意識的なコンプレックスを明らかにすることを目的にして作られたものであった(Murray, 1938)ということにも拠っているといえるだろう。

心理療法においてTATが果たす役割としては、まずDeabler (1947)やHolzberg (1963)が指摘したように、TATの施行自体が治療関係を円滑に結ぶための手段や契機となる点、そして被治療者が語った物語が、その後の治療において治療者と被治療者が関わるための媒介物になる点(下山, 1990)が挙げられるが、本研究で取り上げたいのは、TATにおいて語られた物語から、被検査者(被治療者)が自己理解のきっかけを得るという点である。藤掛・吉田(1963)は、カウンセリングにおいて、1回の面接をTATの施行にあて、以降の面接の中で来談者にできた物語を音読させた。そして「今読んでいただいたお話はあなた自身が作られたのですが、どうして今のような話になったように思うか、なにかあなた自身との関係でも結構ですからそういったところから話をはじめてみていただきませんか」と導入し、来談者の陳述を促した。藤掛・吉田は、この導入が「来談者の自己認知を高め、これを契機に面接を治療的に進展させること」が可能であったという報告をしている。また、村瀬(1978)は事例報告の中で、TATを単なる心理診断のための技法ではなく、治療関係において被治療者が「自分の問題点を受け容れられる許容範囲に応じつつ、意識化して話題とし、時に自己洞察の端緒を掴むのに用いる」と述べている。Bellak (1986)は、TATの施行後に被治療者に対して、できた物語についてどう思うかを訊き、被治療者が物語と自分自身の関係を否定した場合、その被治療者に他の人が作った物語を提示した。そして、それらの物語の違いについてどう思うか質問するという形で、TATを治療にとり入れた。

これらのTATの利用法には共通して、心理検査としてのTATとは異なり、物語の語り手が自分自身で物語を見直し、さらにそこから物語を生み出した自分自身を見るというプロセスが存在している。この体験の中で、語り手が自分自身のあり方に気づき、自己理解を深めていくことが、治療的に意味があるものと思われる。

TAT課題における自己体験

本研究では治療場面に限らず、このようにTATの被検査者が自分自身の作った物語を見直し、いわば自分自身に触れるという体験を、TAT課題における「自己体験」と定義する。そして、被検査者にTATを施行した上で、その被検査者に自分自身が作ったTAT物語を見直してもらい、被検査者がどのような自己体験をするかを、被検査者の言語報告から検討する。

被検査者は、自分自身のTAT物語を見直した時に、必ずしも村瀬(1978)がいう「自己洞察の端緒」を得るわけではないだろう。投影法の産物であるTAT物語は、心のより無意識層に関わる情報であり、語り手自身がこれを「他者の目」で捉え、処理・理解することは、「自己体験(self-experience)を極め進む中で培われた自己観察の目が「他者の目」の域にまで拡充するという、ごく非凡な場合に限られる」(齋藤, 1991)という指摘もある。

また、TAT物語から「みずからを語り報告する」ことをどのような意味次元で受け止めるかは、広く治療的対話状況で治療者がクライアントの語りをどう受け止めるかということにもつながる、さらに検討を重ねるべき問題をはらんでいるといえる。

しかし、TAT課題における自己体験は本質的に、語り手を「自分自身との関連からTAT物語を見直す」という作業に誘う力を持っているということがいえるだろう。自身の物語に触れ、そこ

から得たものを報告する時、語り手は自らの内的な側面に言及せざるを得ない。よって、物語とそれを生み出した自身の関連をいかに見出すかは、その語り手が自分自身の内面に注意を向ける程度と関係していると考えられる。そこで本研究では、語り手自身が物語を見直した時に報告する内容と、その語り手が自身の内面に注意を向ける程度の関係を検討するために、自意識尺度を用いることとする。

自意識尺度日本語版

本研究における「自意識」とは、自意識尺度日本語版（菅原，1984）によって測定される自意識のことである。これはFenigstein（1975）らに基づき、菅原が開発した尺度であるが、この尺度の中で自意識特性は以下の2尺度によって測定されている。ひとつは、自分の服装や他者に対する言動など、他者から直接観察できる自己の側面に注意を向け易い程度を測定する公的自意識尺度であり、もうひとつは自分の内面や感情など、他者から直接観察されない自己の側面に注意を向け易い程度を測定する私的自意識尺度である。これは各項目に対して「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の7件法で回答を求めるものであり、公的自意識を測る質問が11項目、私的自意識を測る項目が10項目である。

この自意識尺度日本語版によって測定される私的自意識が高い被験者は、その被験者自身が作ったTAT物語から、比較的容易に自身との関連を見出すのではないかと考えられる。

TAT物語から見出される自己

先に、TAT物語から自分自身との関連を見出すかどうかは、自身の内面的な側面に注意を向ける程度と関係しているのではないかとという仮説を提示した。

しかし当然ここには、TATにおいてどのような物語が語られたのかという要因も絡んでくるものと思われる。例えば、物語に語り手のネガティブな面が反映されていると感じられた時、その物語と自身との関係は報告されにくいことが予想できるし、あるいはそのような面は意識化さえされにくいということも考えられる。このように、語り手が本来持っている自意識の高さのみならず、その語り手自身がどのように図版を捉え、どのような物語を語ったかということも検討しなければならないだろう。

物語を見直す自己体験が意識的なレベルでなされるのに対し、TAT物語を作り出す過程は、自身の意識的な統制が完全には及ばない状況で、語り手が物語の中で登場人物として行動し、考えたり感じたりするという、投影レベルでの自己体験であるといえる。ここで語り手はある程度の方向性を図版に規定されつつも、その中で登場人物を思うままに活動させ、主体として物語を自由に作ることになる。そしてこの時、語り手は同時に、自身の意識の及ばないレベルのものを体験することになるだろう。

このような投影レベルでの自己体験を経て作成されたTAT物語の内容と、意識レベルでの自己体験がどのような関係を持つのかということは、本研究において検討すべき課題の1つであろう。本研究においては、TAT物語の内容を、物語中の登場人物の全体的な動きから捉えるために、齋藤（1973）が示したTATの分析・解釈における着眼点を参考にして、TAT物語における「物語中に示された葛藤および危機的状況の有無」、「登場人物の主体的な（解決）行動の有無」、「結末の

ありよう」を中心に検討することとする。

またさらに、自意識尺度によって測定される自意識が本来その語り手が持っている性質であることを考えると、自意識の高さと語られる物語との関係も検討する必要があるだろう。

物語へのコミットメント

下山（1990）が考案した「絵物語法」の手続きにおいては、「物語のコンテクストの位置づけ」として、「この物語の中にあなたらしさが出ているとしたら、どのようなところでしょう」あるいは「物語の内容を、現実場面でのあなたの対人関係のあり方との関連でみ直した場合、何か思い当たることはありませんか」と質問をする。これは下山によれば「語り手の想像である物語を、現実場面のコンテクストの中に位置づけていく作業」である。そして聴き手は、「適切な解釈や感想を伝えることにより、語り手がこの作業を通して現実の対人場面に反映している自らの認知の在り方や特色に気づいていくよう援助する」としている。

このように「絵物語法」においては、この過程は語り手と聴き手の二者関係の中で生起するものであるとされている。二者関係の中で物語を見直していく作業は、その形式自体が、自然と語り手に自身の内面へと向かわせる方向性を持っているといえるだろう。その作業の中で、語り手は自身の語った物語にコミットし、そこから現実場面での自身のあり方に気づいていく。

本研究では集団法でTATを施行し、物語を見直す過程も質問紙による質問への回答という形で行うが、被験者に自身の物語に対する主体的な関与を促すための手続きとして、TAT施行後に自身が作った物語の内容を思い出して筆記するという再生課題を課することとする。この課題において被験者は、単に自身の物語を再生するだけではなく、TAT物語を作成した時の自身の体験を反芻し、投影レベルでの自己体験を再体験することになるだろう。

さらに本研究では、再生課題後に、複数の物語の中から「最も気に入った物語」を被験者にひとつ選択させ、その物語に関する質問を行うことによって、その物語に対する更なる焦点づけを試みることにする。このようにして、被験者に対して物語へのコミットメントを促した上で、その物語と、物語から被験者が報告する内容を検討することとする。

【目 的】

自意識尺度によって測定される私的自意識は、被験者が自身のTAT物語を見直した時になされる報告の内容とどのような関係があるかを検討することを目的とした。また、被験者の自己報告と、そのもとになる被験者が「最も気に入った」物語の内容との関係を検討すること、そして、自意識が被験者の持っている性質であるという視点から、被験者の私的自意識の高さの程度とその被験者が「最も気に入った」物語の内容の関係を検討することも併せて目的とした。

【方 法】

・被験者

大学生および大学院生の男女60名（男性34名、女性26名、年齢の平均21.2歳、SD1.95）に、集

団法による調査を行った。1回の調査ごとの被験者数は5名程度であり、複数回に分けて行った。

・材料

(1) TAT図版の冊子

今回用いた図版は、マレー版の図版1, 2, 14, 19である。図版の選択に関しては、佐野、横田(1959)のTAT図版の条件に関する観点を参考にした。これはTAT図版に対する投影内容には大別して形式的側面(人間関係)と内容的側面(精神状態)とがあるという観点である。佐野、横田の分類において、比較的形式的側面を規定し、内容的側面を自由にした図版のグループに属する図版から2枚(図版1, 2)、比較的内容的側面を規定し、形式的側面を自由にした図版のグループに属する図版から2枚(図版14, 19)を選定した。これらを図版番号の小さい順に呈示して、物語の作成を求めた。図版は冊子のそれぞれのページに印刷した状態で被験者に渡し、ページの下半分の空白部分を、物語を書くための欄として用いた。

(2) 物語に関する質問紙と自意識尺度質問紙

TAT図版の冊子とは別に、TAT物語に関する質問紙を作成した。この冊子の表紙をめくった1枚目は白紙を点線で4つの区画に区切ったものにし、再生した物語の記入に使用した。以降のページの物語に関する質問では、気に入った物語に関する質問として、「そのお話をどんな風に気に入っているか」と「そのお話に自分自身はどのように反映されている気がするか」を尋ね、回答を求めた。さらに、それぞれの図版の印象(好き・嫌い・どちらでもない、から選択)と、それぞれの図版の印象を具体的に尋ねた。次に、それぞれの物語を見直して注意が向く点を読み、その後、物語を作ってみての全体的な感想を自由記述で求めた。

この質問紙の最後に、自意識尺度質問紙を添えた。尺度項目は菅原(1984)が作成したものから、私的自意識尺度項目(10項目)と公的自意識尺度項目(11項目)の全てを採り入れて構成し、7件法で回答を求めた。項目にはランダム化とカウンターバランスの処理を施した。

・手続き

被験者を着席させ、TAT図版の冊子を配布した。

教示は坪内(1997)を参考にして、以下のように行った。

「今お渡しした冊子には、それぞれのページに、色々な人や風景の絵が描かれています。その絵を見て思い浮かぶ物語を作って、絵の下の余白に書いてください。その絵の中の人は、今、何を感じどうしているのか、その絵の前にはどんなことがあって、その絵の後にはどうなっていくのか、ということをお話の筋をつけて書いて下さい」

以上の教示に加えて、図版が4枚あることを伝えてから、TATを施行した。所要時間は1枚につき5分程度であった。物語を書き終えたらそのまま待っているように伝え、次の図版に進む時は調査者が指示を出して、全員同時にページをめくらせた。

TATの施行後、冊子を被験者の手元に残して、物語に関する質問紙を配布した。そして被験者に、この質問紙の1枚目の白紙のページに物語を再生させた。この時の教示は以下の通りである。「今お話を作ってもらったわけですが、それらはどのようなお話だったのでしょうか。お話を思い出して、はじめに配った手元の冊子を見ずに、今配った紙に書いてみて下さい。これは記憶力のテストではありません。ですから、絵の順序やお話の数などは気にせずに、思い出せるだけ書いてみて下さい」

再生課題の所要時間は15分ほどであった。このようにして再生をさせた後、被験者に再生した物語の中で一番気に入った物語を1つ選ばせた。そして最初に配布した冊子の図版と作成した物語を見直してもらい、物語に関する質問への回答を求め、最後に自意識尺度質問紙を施行した。以上の手続きで、全体の所要時間は約1時間であった。

【結 果】

方法に示した手続きによって、60名の被験者それぞれについて、4枚の図版に対するTATプロトコルと、物語に関する質問への回答、自意識尺度得点が得られた。

自意識尺度得点は、自意識の2つの因子である公的自意識尺度得点と私的自意識尺度得点をそれぞれ算出した。私的自意識尺度得点の平均は50.0 (SD9.02)、公的自意識尺度得点の平均は54.6 (SD9.16) であった。これらを合計した自意識尺度総得点の平均は、104.5 (SD13.12) であった。

次に、物語に関する質問に対する回答から被験者を分類した。分類にはLuborsky (1953) のTAT自己解釈法における分類を参考にして、「物語に内的なレベルでの自己の性格や願望、理想、信条などが現れている」とするもの（「自己言及あり」群）、「物語に外的、現実的なレベルでの自身の具体的な体験が現れている」とするもの（「体験」群）、「物語と自身との関係を否定したり、読んだ本や観た映画などの影響だとしたり、自身の物語を作る能力に関する指摘をする」もの（「自己言及なし」）群の3群に分類した。「自己言及あり」群の判定については、単に「自分の性格」（が反映している）という記述では不十分とし、自分自身のどのような性格が反映しているのかという具体的な記述をもって「自己言及あり」群に分類することとした。

「自己言及あり」群では物語の主人公と自身の性格の類似点を指摘する記述の他、自分自身が物語中の登場人物と同じように、「色々悩むがそれを乗り越えて進んでいけるようでありたい」と思っている、「今は苦しいが、きっとそれを乗り越えていけると信じている」といった記述や、物語の設定について、そのような状況を現実の自分自身も望んでいるといった記述が見られた。

「体験」群では、「物語の中で起きたことと同じことを実際に自分も体験した」、「物語のような状況になった時に自分も主人公のように行動する（した）」といった記述が見られた。「自己言及なし」群では、「特に自分自身が反映されているとは思わない」、「むしろ自分自身から一番遠そうな世界である」、「最近読んだマンガの影響があると思う」といった記述が見られた。この判定により、「自己言及あり」群は22名、「経験」群は9名、「自己言及なし」群は29名となった。

被験者60名を自意識尺度総得点、私的自意識尺度得点、公的自意識尺度得点でそれぞれ上位群・下位群をカテゴリとした時、期待度数が5以下のセルが全体の20%以上になったので、「体験」群と「自己言及なし」群のセルを合併して2×2の χ^2 検定を行った（表1～3）。私的自意識尺度得点の上位群・下位群をカテゴリとした時、人数の偏りは有意であった（ $\chi^2(1) = 5.81$, $p < .05$ ）。公的自意識尺度得点の上位群・下位群をカテゴリとした時、人数の偏りは有意ではなかった（ $\chi^2(1) = 0.00$, ns）。自意識尺度総得点の上位群・下位群をカテゴリとしたときも、人数の偏りは有意ではなかった（ $\chi^2(1) = 0.64$, ns）。

表1 私的自意識尺度得点の上位群・下位群と、自己言及の有無

	自己言及あり	その他
私的自意識上位群	16	14
私的自意識下位群	6	24

* $p<.05$

表2 公的自意識尺度得点の上位群・下位群と、自己言及の有無

	自己言及あり	その他
公的自意識上位群	11	19
公的自意識下位群	11	19

表3 自意識尺度総得点の上位群・下位群と、自己言及の有無

	自己言及あり	その他
自意識上位群	13	17
自意識下位群	9	21

次に、被験者を私的自意識尺度得点の上位群・下位群で分けたときに、それぞれの群が最も気に入った物語の特徴を検討した。最も気に入った物語の図版の内訳は、表4に示した。

表4 最も気に入った物語の内訳

	図版1	図版2	図版14	図版19
私的自意識上位群	5	7	12	6
私的自意識下位群	4	5	13	8

それぞれの被験者が気に入った物語を分析し、「物語中に示された葛藤および危機的状況の有無」、「登場人物の主体的な（解決）行動の有無」、「結末のありよう（幸・不幸・いずれとも不明）」を判定し、分類した。これらをカテゴリとして χ^2 検定を行ったところ、「登場人物の主体的な（解決）行動の有無」と「結末のありよう」について、表5、6に示したように、人数の偏りに有意な差が見られた（ $\chi^2(1)=6.67, p<.01$, $\chi^2(2)=8.10, p<.05$ ）。「結末のありよう」について残差

表5 私的自意識と「最も気に入った物語」における登場人物の主体的な（解決）行動の有無

	行動あり	行動なし
私的自意識上位群	20	10
私的自意識下位群	9	21

** $p<.01$

表6 私的自意識と「最も気に入った物語」における結末のありよう

	幸	不幸	不明
私的自意識上位群	21	2	7
残差	2.58**	-2.33*	-0.85
私的自意識下位群	11	9	10
残差	-2.58**	2.33*	0.85

* $p<.05$ ** $p<.01$

分析を行ったところ、私的自意識尺度上位群に結末「幸」が有意に多く、また結末「不幸」が有意に少ないという結果が出た。

また、これらを「気に入った物語」についてではなく、4枚の図版それぞれに対する物語ごとに分析したところ、表7、8に示したように、図版1と図版14の物語における「結末のありよう」に、人数の偏りに有意な差が見られた ($\chi^2(2)=6.96, p<.05$, $\chi^2(2)=8.68, p<.05$)。それぞれについて残差分析を行ったところ、両図版ともに私的自意識上位群において結末「幸」が有意に多いという結果が出た。

表7 私的自意識と図版1の物語における結末のありよう

	幸	不幸	不明
私的自意識上位群	17	6	7
残差	2.63**	-1.16	-1.64
私的自意識下位群	7	10	13
残差	-2.63**	1.16	1.64

**p<.01

表8 私的自意識と図版14の物語における結末のありよう

	幸	不幸	不明
私的自意識上位群	17	4	9
残差	2.92**	-1.56	-1.58
私的自意識下位群	6	9	15
残差	-2.92**	1.56	1.58

**p<.01

さらに、被験者を「自己言及あり」群と「その他」群に分け、「最も気に入った」物語について、「物語中に示された葛藤および危機的状況の有無」、「登場人物の主體的な（解決）行動の有無」、「結末のありよう（幸・不幸・いずれとも不明）」をカテゴリとして χ^2 検定を行った。なお、最も気に入った物語の図版の内訳を表9に示した。

表9 最も気に入った物語の内訳

	図版1	図版2	図版14	図版19
自己言及あり群	4	5	8	5
その他群	5	7	17	9

χ^2 検定の結果、表10、11に示したように、「葛藤および危機的状況の有無」と「結末のありよう」について、人数の偏りに有意な差が見られた ($\chi^2(1)=3.98, p<.05$, $\chi^2(2)=8.69, p<.05$)。「結末のありよう」について残差分析を行ったところ、「自己言及あり」群において結末「幸」が有意に多く、また結末「いずれとも不明」が有意に少ないという結果が出た。

表10 自己言及と「最も気に入った物語」における物語中に示された葛藤および危機的状況の有無

	あり	なし
自己言及あり群	19	3
その他	22	16

*p<.05

表11 自己言及と「最も気に入った」物語の結末のありよう

	幸	不幸	不明
自己言及あり	17	3	2
残差	2.82**	-0.71	-2.51*
その他	15	8	15
残差	-2.82**	0.71	2.51*

*p<.05

**p<.01

さらに、これらを「気に入った物語」についてではなく、4枚の図版それぞれに対する物語ごとに分析したところ、表12に示したように、図版14に対する物語における「物語中に示された葛藤および危機的状況の有無」に、人数の偏りに有意な差が見られた ($\chi^2(1) = 4.92, p < .05$)。

表12 自己言及と図版14の物語における物語中に示された葛藤および危機的状況の有無

	あり	なし
自己言及あり群	20	2
その他	23	15

*p<.05

【考 察】

自意識尺度得点と自己言及について

私的自意識尺度得点の上位群には、自己言及あり群の被験者が有意に多いという結果が出た。これは、本研究の仮説を支持するものである。私的自意識の高い被験者は、自身の物語を対象として捉えながら、同時に自己の内面や感情、気分などに注意を向ける程度が高く、これが両者を結びつける自己言及につながったものと思われる。また逆に、私的自意識の低い被験者は、自身の物語を飽くまで対象として捉え、同様に外的な対象である読んだ本や観た映画などとの共通点を見出したり、自身との関連が否定されたりといったことがされ易かったものと思われる。

Luborsky (1953) によれば、「映画や小説や人から聞いた話などからヒントを得た」とするものは、「物語と自分自身は関係がない」と分類される。しかし厳密に言えば、鈴木 (1997) が指摘しているように、そのような言及自体にすでに主体の要因が加わっているといえる。物語に「読んだ本や観た映画が反映されている」という言及がなされる時、そこにはこれらの本や映画を読んだり観たりしたという個人的な経験がもとになっており、また、その体験における内的な印象も決して無関係ではない。しかし、そのような関連づけをした自身の内面についての言及がなされなかったという点において、これらには自己言及あり群と一線を画すものがあるといえるだろう。

しかし、物語と自己の内面との関連づけは、被験者の私的自意識の高さが物語内容自体に反映され、それによってなされたとも考えられる。そこで、私的自意識の上位群下位群において、被験者がどのような物語を最も気に入ったとして選択したのかを以下に検討する。

私的自意識尺度得点と物語の特徴について

私的自意識が高い被験者が最も気に入ったとして選択した物語には、登場人物の主体的な（解決）行動があり、また結末が「幸」であるものが多く、また結末が「不幸」であるものが有意に少なかった。これを、選択以前に私的自意識の高い被験者が作った4つそれぞれの物語の傾向と併せて検討する。私的自意識の高い被験者が作った図版1と図版14の物語において、結末が「幸」であるものが有意に多かった。鈴木（1997）は図版1について「たいていの人（80～90%）は、少年に悩み、悲しみ、不安といったネガティブな内的状態を認める」、また図版14については「内側の暗黒が暗い状況を連想させるのであろう、内から外への「脱出」がテーマになった反応が非常に多い」と指摘している。このようなTAT図版の特性という視点から検討すると、私的自意識の低い被験者が、ネガティブな内的状態、暗い状況を示している図版を見た時に、そのような図版の特性に影響され、そのままネガティブな結末に物語を導いたのではないだろうか。それに対して私的自意識の高い被験者は、その図版特性のみに引きずられることなく、結果を「幸」に導く内的な動きが見られたのではないだろうか。

このような私的自意識の高さによる物語の「結末」における特徴の違いがある中で、被験者が「気に入った」として選択した物語にも同様の特徴が示され、また、さらにここでは「登場人物の主体的な（解決）行動の有無」においても特徴の違いが見られた。即ち、「登場人物の主体的な（解決）行動」が示されている物語は、私的自意識の高い被験者にとって惹きつけられるものがあったといえる。齋藤（1973）は、TATにおいて「被検者は絵の中に入っていく、そこにいる人物などにいつのまにか同一化しながら絵の中を空想的・想像的に動きまわる。したがって、語りだされたものはこの動きまわりの軌跡だともいえよう」と指摘している。この空想的・想像的な「動きまわり」においては、先に筆者が述べたように、この時の語り手は、その「動きまわり」を制御する主体としていながら、同時に自身の意識の及ばないレベルのものを体験しているといえる。このような投影情報は「意識体系のルールの外で産出され、精神力動をくぐる中でいろいろによじれて変形」（齋藤、1991）した上で、物語として現れるのである。ここには、被験者にとっては「自己の内の「他」なるもの、「非自己」（齋藤、1991）が関わっている。私的自意識の高い被験者は、それを「他者の目」で受け止めて理解するまでは行かずとも、そのような動きに対する感受性の高さを持っており、それによって被験者は知らず知らずのうちに物語を「気に入った」として選択するに至ったのではないだろうか。

自己言及の有無と物語の特徴について

物語と自身の関連を見出したかどうか、即ち自己言及の有無で被験者を分けた時、両者の「気に入った」物語の特徴にも差異が見られた。これについても、自己言及のあった被験者が「気に入った」物語の選択以前に作った物語の全体的な傾向と併せて検討する。

表12に示したように、「気に入った」物語において自己言及があった被験者は、図版14の物語において、物語中に葛藤および危機的状況を提示することが多かった。図版14の物語において、「囚われの身の人が逃げたいと思っている」、「暗い過去と訣別して明るい未来に向って翔いていく」（鈴木、1997）といった、「脱出」がテーマになる反応が多いことは先に触れたが、自己言及のあった被験者においては、まさにこのような「逃げたい（が逃げられない）」、「翔いていきたい（がそうできない）」といった葛藤状況が提示されることが多かったものと思われる。一方、

このような反応以外に、少なくないものとして鈴木が挙げているのが、「寝起きの人が新鮮な空気を吸い、すがすがしい気分である」あるいは「仕事を終えた人が星がまたたく夜空を見上げ憩っている」といった反応である。

後者の「脱出」がテーマにならない反応においても、「現実の日常においても同様の行為を好む自身の性質」などといった形で自己言及につながる可能性はあるものと思われるが、そうはなっていないようである。一方、選択され、そして自己言及がなされた物語の特徴として表10, 11から浮かび上がってくるのは、「何らかの葛藤および危機的状況が提示されるが、(何らかの形で)その状況は解消され、幸せな結末を迎える」というものになる。このような物語から、有意に多くの自己言及がなされたわけであるが、この場合の自己言及の形として、「そのような苦しい状況においても最後は必ず明るい未来が待っているという自身の希望が現れている」、といったものが見受けられた。意識レベルでの自己体験においては、このような「葛藤」状況から「幸」せな結末という物語から、自身の内面的なものを見出し易かったものと思われる。

以上のことは、自己言及あり群において、結末「いずれとも不明」が有意に少ないという点からもうなずける。結末がいずれとも不明で終わっている物語は、被験者にとっては自己の内面的な側面と関連づけて報告する材料に乏しかったということが考えられる。

自己言及に至るプロセス

先に述べたように、自己言及の有無で被験者を分けた時、物語と自己の内面を関連づけた被験者に「気に入った」として選択された物語には、「物語中に提示された葛藤および危機的状況」があるものが多く、また「結末」が「幸」で終わっているものが多かった。このことから、意識的な自己体験において、これらの特徴が自己言及のされ易さにつながったのではないだろうかとか考察した。

しかしその一方で、私的自意識の上位群には、物語と自己の内面を関連づけた被験者が多く、その私的自意識の上位群の被験者が「気に入った」物語には、「登場人物の主體的な(解決)行動」があり、また「結末」が「幸」で終わっているものが多かった。自己言及が結果として意識的な視点から見て捉えられる「葛藤および危機的状況」や「結末」がきっかけになってなされるとしても、私的自意識の高さによるTAT課題体験とTAT物語そのものの内容の差異も、そこに関与しているのではないだろうか。

先に、私的自意識の上位群における「気に入った」物語の特徴であった「結末」については、図版特性に引きずられない内的な動きが関係しており、「登場人物の主體的な行動」については、「自己の内の「他」なるもの、「非自己」」の動きに対する感受性の高さが関係していると述べた。これらはいずれも投影レベルでの自己体験のありようの反映であり、私的自意識の高さによるものであるが、また同時に、その後の意識的な自己体験における自己言及の潜在的な要因にもなっていることが考えられる。即ち、自身のTAT物語において示された「危機的状況」から幸せな「結末」に至るという特徴に注目し、そこから自己言及がなされたにしても、この自己言及には、TAT課題体験において、物語の登場人物に「主體的な行動」を取らせ、また図版特性に引きずられずに「結末」を導いたことによって、内的に賦活されたものの影響もあるのではないだろうか。

被験者の主観的な体験としては、「葛藤および危機的状況」から幸せな結末に至る物語から、

自己の内的な側面との関連を見出した、というものになる。しかし、その関連を見出すまでの過程には、そのような「葛藤および危機的状况」を、登場人物に「主体的な（解決）行動」を取らせることによって「幸」せな「結末」に導こうとすることで賦活された、いわば被験者にとっては意識できないレベルの主体性が関与しており、この賦活された主体性が、被験者による物語の選択と、その後の自己体験における、TAT物語と自身の内的な側面の関係の指摘につながったものと思われる。

齋藤（1991）は、投影法における反応に対する評価者の受け止め体験について、以下のように述べている。「他人の投影反応への感受性とは、自分の内側で起こる「その反応への反応」に開かれた感受性に他ならないというふうな見方を促す。そしてその感受性は意識下で起こる自分自身の未分化で不透明な体験に向けてできるだけ開かれた感受性である」。通常の投影法において評価者とは被験者とは異なる人物であるが、この指摘は、本研究における被験者自身が自身の反応を見直す（評価する）という行為についても、示唆を与えてくれるものであるといえよう。

さいごに

以上のように、被験者自身が自己との関連を見出した物語の特徴と、私的自意識が高い被験者が物語において示した特徴には、重なる部分もあり、異なる部分も見られた。私的自意識が高い被験者には、結果として自己言及をした被験者が多くいたことから、語り手によって自己言及がなされる要因として、被験者の意識的な視点によって把握される特徴以外のものの存在が示唆されたといえよう。このことは、TAT物語という投影情報を被験者自身が「他者の目」で捉え・理解することの困難を反映しているともいえる。

しかし、このことによって実際の心理療法におけるTATの利用の有効性が否定されるわけではない。先に述べたように、自身のTAT物語と向き合うことは、自身の内面と向き合うことにつながり、Bellak（1986）も指摘しているように、これが「心理療法的な態度」を促進することにつながる。また、自己体験とは文字通り自分自身を体験する過程であり、その過程は極めて個人的なものである。他者の視点から見た時にその妥当性が疑問視されるようなものであっても、語り手にとっては、それによって自身がリフレッシュされるような、自己感得的な体験につながることもあり得る。このように、物語と自己との関連を見出すという主観的な体験が、語り手自身にとってどのような意味を持つのかということについては、今後の検討を要する課題である。

【文 献】

- 安香宏：TAT：異常心理学講座8, 119 - 169, みすず書房, 1990.
Bellak, L. : *Thematic Apperception Test, The Children's Apperception Test and The Senior Apperception Technique in Clinical Use* (4th edition), Grune & Stratton, Inc. , 1986.
Deabler, H. : *The Psychotherapeutic Use of The TAT*, Journal of Clinical Psychology, 3, 246-257, 1947.
Fenigstein, A. et al : *Public and private self-consciousness: Assessment and theory*, Journal of Consulting and Clinical Psychology, 43, 522-527, 1975.
Hartman, A. A. : *A basic TAT set*. Journal of Projective Techniques and Personality Assessment, 34, 391-396, 1970.

- Henry, W. E. : *The analysis of fantasy*. New York, John Wiley & Sons., 1955.
- Holt, R. R. : The TAT. In R. R. Holt, *Methods in clinical psychology*, Vol. 1. *Projective assessment*, New York, Plenum Press, 1-208.
- Holzberg, D. : *Projective Techniques and Resistance to Change in Psychotherapy as Viewed Through a Communication Model*, *Journal of Projective Technique*, 27 (4) , 430-435, 1963.
- 藤掛永良・吉田猛：TATを媒介としたカウンセリングの経験, 日本心理学会第27回大会発表論文集, 461, 1963.
- Luborsky, L. : *Self-interpretation of the TAT as a Clinical Technique*, *Journal of Projective Technique*, 17, 217-223, 1953.
- 村瀬嘉代子：さまざまな身体症状を訴えた一少女のメタモルフォーゼーわがうちなる「雪女」に気づくまで一, 季刊精神療法, 4 (3) , 225-234, 1978.
- Murray, H. A. et al : *Explorations in personality*, Oxford University Press, 1938.
- Rapaport, D. : The Thematic Apperception Test. In D. Rapaport, *Diagnostic psychological testing*. Vol. 2. Chicago, Year Book Medical Publishers, 395-459, 1946.
- 齋藤久美子：TAT. 倉石精一編：臨床心理学実習, 134-157, 誠信書房, 1973.
- 齋藤久美子：人格理解の理論と方法. 三好暁光他編：臨床心理学2, 151-184, 創元社, 1991.
- 佐野勝男・楨田仁：TAT図版の条件について. 戸川行男他監修：TAT, 中山出版, 40-73, 1959.
- 下山晴彦：「絵物語法」の研究, 心理臨床学研究, 7 (3) , 5-20, 1990.
- Stein, M. I. : *Thematic Apperception test : an introductory manual for its clinical use with adult males*, Cambridge, Mass Addison-Wesley, 1948.
- 鈴木睦夫：TATの世界, 誠信書房, 1997.
- 坪内順子：TATアナリシス, 垣内出版, 1997.
- 山本和郎：TATかわり分析, 東京大学出版会, 1992.

(博士後期課程3回生, 臨床心理実践学講座)

(受稿2004年9月9日, 改稿2004年11月19日, 受理2004年11月30日)

Self-experience in TAT and “self-consciousness”

TAKAHASHI Satoru

TAT is helpful in psychotherapy. One of the reasons this is mentioned is that while looking over the TAT story by oneself, it becomes a self-experience and this may be the chance to understand oneself. In this study, subjects were asked to recall and write the stories they had made and to select their favorite story. Subsequently, they were asked as to how they themselves would be reflected in the story and then the self-consciousness scale for Japanese was carried out. The result was that subjects with a higher private self-consciousness, which were many, pointed out the relation of the story and their inner self. They had an active action of characters and had many stories with a happy ending. The stories of the subjects who pointed out the relation of the story and their inner self had conflicts and critical situations. In addition, many had stories with a happy ending. Although self-reference was made by pointing out the features of such a story, it was thought that self-reference was related to the features also, which the story of the subject with a higher private self-consciousness displayed. It was suggested that making the characters take active action in the story activated the autonomy of the level, which a subject couldn't be conscious of and that this led to self-reference.